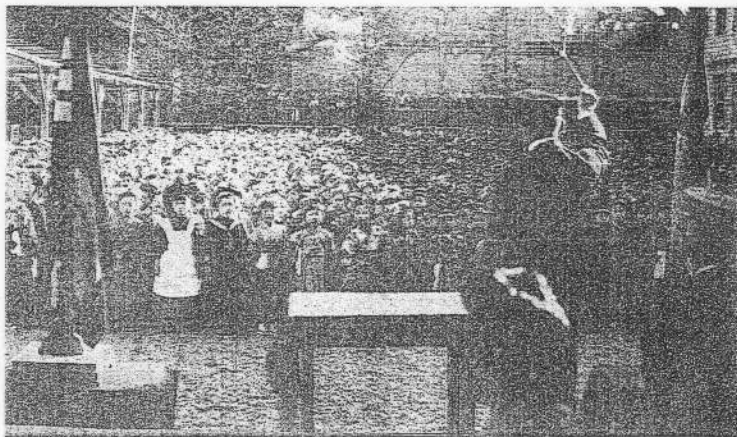


横浜市歌誕生100周年 人気の秘密は...

原曲手直し 歌いやすく 横響、制定の経緯調べ冊子に



「横浜市歌」の練習をする老松小学校の子どもたち。記念式典では各学校から選ばれた子どもたちが歌を披露した(明治42年ごろ)

イベントで歌おう横浜市歌

横浜市歌の誕生百周年を記念して横浜市では、今年実施される各種の記念事業などで市歌を歌う機会をつくつてまいり、市歌に親しんでもらうとともに、若い世代のアレンジで新しい市歌バージョンが生まれてくることも期待している。

合唱(日本初の混声合唱)を指導したことが認められ、母校の助教に授けられたこと、

つわが日の本は島国よ、こんな歌い出して親しまれる横浜市歌。文筆家、森村太郎(随外)の作詞で、開港五十周年を記念して一九〇九年(明治四十二年)に制作された。開港百五十周年は、市歌誕生から百年である。先ごろ発表された横浜市歌の「おきな横浜の歌」アンケートでは堂々の四位に入るほど、市歌としては「異例」の人気ぶりだ。そんな横浜市歌について、「横浜交響楽団」小嶋智功理事長(随外)が制定の経緯などを調べ、小冊子にまとめた。

典に類し「市歌ならべからず」として、すでに文筆とされた随外に作詞を請い、作曲は東京音楽学校(東京芸術大学の前身)に依頼した。同校は、助教出身者で、の前身、二十七歳で助教となり、小嶋唱歌編纂委員、作曲委員でもあった若き南無衛を作曲者に指名した。

「同じ曲も芸術的」と、小嶋さんも、手塚さんも高く評価する横浜市歌だが、市民に愛唱されるようになるとは、原曲を一部手直しし、歌いやすくしたことが挙げられる。

「今も昔も舟も丹、行く処ぞ見や、果てなく歩み行くらんみ代を、飾る空も入るく港」



冊子は、A4サイズの四十五頁。コンサート全般を仕切る後援の運営委員長であり、洋楽文化研究会委員でもある手塚賢一さんが三年がかりで丹念に資料を集め、小嶋理事長も協力してまとめた労作だ。

随外日記をばしめ、横浜貿易新聞(神奈川新聞の前身)など当時の新聞、また市、市教、学校などが発行した出版物にも幅広く目を渡し、横浜市歌が「このようなたちによって作られ、演奏され、普及していったか」を詳細に掘り起している。



「冊子は印刷物にして配布する」として、

Advertisement for Santory's 'Black Sesame' (黒酢にんにく) featuring a bottle image and text describing its health benefits. The text includes 'SANTORY 黒酢にんにく' and '注目の健康食材が贅沢に両方入って、日わすか60倍大'.

Large advertisement for Santory's 'Black Sesame' (黒酢にんにく) with a focus on health and vitality. It features a large image of a person and text like '何でそんなに元気なのって、よく言われます。' and '歳を重ねると、むしろ元気がよくなる。'.